

2020 年度第2回「ジャワ語及び東南アジア諸語テキストにみる宗教変容—イスラーム化過程における国家の戦略と役割」研究会

- 日時：2021年3月17日（水） 13:00–18:00
- 場所：オンライン
- 使用言語：日本語
- プログラム

**13:00–14:00 久志本浩子（AA 研共同研究員，上智大学）**

「ヒカヤット・メロン・マハワンサーあらすじ、先行研究と改宗ストーリーの位置づけ」

**14:00–15:00 富田暁（AA 研共同研究員，岡山大学客員研究員）**

「『ヒカヤット・ウプ＝ダエン＝メナンブン』と 18 世紀西ボルネオ社会」

**15:10–16:10 山崎美保（AA 研共同研究員）**

「マジャパヒト時代の王と宗教：刻文と『デーシャワルナナ』を中心に」

**16:10–17:10 吉本康子（AA 研共同研究員，京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員）**

「チャムの宗教とサカライ・ポー・クッ・イラッフについて」

## 要旨

久志本浩子「ヒカヤット・メロン・マハワンサーあらすじ、先行研究と改宗ストーリーの位置づけ」

富田暁「『ヒカヤット・ウプ＝ダエン＝メナンブン』と 18 世紀西ボルネオ社会」

本報告では、『ヒカヤット・ウプ・ダエン＝メナンブン（Hikayat Upu Daeng Memambun : 以下、HUDM）を題材に、テキストである HUDM の解説と内容紹介をおこない、テキスト内容をもとに 18 世紀西ボルネオ（現在のインドネシア西カリマンタン州に相当）社会の予備的考察を行った。

HUDM の主要な内容は、18 世紀前半に西ボルネオで活躍し、最終的には当地に存在した諸国の一つであるムンパワ（Mempawah）の支配者となったブギス人、ウプ・ダエン＝メナンブン（以下、メナンブン）の事績である。HUDM はメナンブン本人がブギス語で記したと推定されており、そうであれば 1760 年代頃までには原本が成立したと考えられる。ただし、ブギス語のテキストは現在知られておらず、現在知られているマレー語のテキストは、彼の息子が 18 世紀末頃に翻訳したものが原型であるとされる。

同時代のマレー世界に関わるマレー語史料としては、*Silsila Melayu dan Bugis* や *Tuhfat al-Nafis* などがある。HUDM の記載内容には、それらの記載内容と重なる部分もあるが、HUDM に特有の記述や視点も多く含まれている。

HUDM として現在までに確認されているテキストは、オランダのライデン大学図書館に所蔵されているもの (Cod. Or. 1754) が唯一のものである。ジャウィ表記のマレー語で記されているこのライデン大学図書館版のテキストにはタイトルや著者が記されていない。HUDM のタイトルは、内容をもとにして後に付けられたものである。また、全 66 ページのライデン大学版のテキストには 1810 年頃の出来事や人名が存在し、テキスト末尾には書写した人物が記したと考えられるヒジュラ暦 1262 年 (西暦 1845 年～46 年) の記載がある。このことから、ライデン大学図書館版が 19 世紀中頃に書写 (作成) されたと考えられることと、そのさいあるいはそれ以前の段階において原本内容に対する加筆・修正が行われたことがわかる。

ライデン大学図書館版をもとに翻字あるいは翻字・訳注をしたものには、[Rogayah 1980] (Rogayah A. Hamid. ed. 1980. *Hikayat Upu Daeng Menambun*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.) と [Schulze 1990] (Fritz Schulze. 1990. *Die Chroniken von Sambas und Mempawah: Einheimische Quellen zur Geschichte West-Kalimantans*. Heidelberg: Julius Groos.) がある。どちらもジャウィ表記の原文は記載していない。また、[Rogayah 1980] は参照・使用した原本を明確にしているが、翻字されたテキスト自体はライデン大学図書館版のテキストと概ね一致している。しかし、ライデン大学図書館版のテキストと比べると、欠けている部分が幾つもあり、段落ごと欠けている部分も複数存在する。[Schulze 1990] はライデン大学図書館版を原本としており、西ボルネオの中心勢力の一つであったサンバスに関する史料の翻字・訳注も併せて掲載している。

HUDM の主な内容は、メナンブンが西ボルネオで地位を獲得し、ムンパワ (Mempawah) の支配を確立するまでの過程 (1720 年代～30 年代頃) であり、以下のような内容と流れになっている。

①メナンブンが最初に地位を獲得する、西ボルネオのマタン (スカダナ) の王統。②メナンブンとその兄弟たちの紹介 (メナンブンの兄弟たちは、ジョホール・リアウで副王の地位に就いて実質的支配者となるなど、マレー世界各地で活躍した)。③マタンにおいて王族による反乱が発生し、その鎮圧のさいにメナンブンとその兄弟が活躍する。④メナンブンと兄弟たちの、シアク、マレー半島、西ボルネオでの活躍。⑤マタンでの王位継承問題勃発とそのさいのメナンブンの動向。⑥ムンパワの王族の血統を引く、メナンブンの妻のクスンバ (Kesumba) ならびにその母と祖母について。⑦ムンパワの王の死去の知らせを受け、ムンパワの王族であるクスンバが王位継承者として夫のメナンブンと共にムンパ

ワに帰還すると、他の王族との間で遺産相続をめぐる確執が発生。⑧バタヴィアや西ボルネオにおけるメナンブンの息子の活動。⑨メナンブンの息子とムンパワのダヤック人との取引において、ダヤック人側が代金支払いを渋ったことで諍いが発生。⑩クスンバとメナンブンに不満を持っていたムンパワの王族の一部が、ダヤック人側と手を組んでクスンバとメナンブン側に戦闘を仕掛ける。⑪メナンブンはジョホール・リアウにいる自身の兄弟に援軍を要請し、西ボルネオ各地の勢力も巻き込みながら戦闘が続く。⑫メナンブンとクスンバ側が最終的に勝利し、敗れたムンパワの王族は逃走。メナンブンは、同じく敗れたダヤック人勢力と忠臣誓約を結び、ダヤック人を支配下に組み込む。⑬勝利の宴会の後、メナンブンの兄弟が帰郷。

HUDM は、従来の研究や史料からでは詳細が不明な点が今も多数ある、18 世紀前半における、ムンパワや西ボルネオ各地の王権や社会についての情報を多く有している。例えば、交易関係や君臣関係など、西ボルネオの支配者層を形成したマレー人やブギス人と被支配者層であったダヤック人との関係や動向をはじめとして、18 世紀前半の西ボルネオの諸勢力間の関係や動向、ジャワやマレー半島と当時の西ボルネオとの政治・文化的関係などを考察するさいに、HUDM の持つ情報は有用かつ貴重である。また、HUDM がブギス人側の視点によった史料であることには注意が必要だが、当時の西ボルネオにおけるブギス人の活動と影響力を考えるさいにも HUDM は重要な史料となる。一方で、18 世紀中頃から西ボルネオで勢力を拡大していく華人に関する描写は皆無であり、この点は他のマレー語史料も同様の傾向を持っている。

本プロジェクトの主要検討テーマであるイスラームについて、HUDM は直接的な情報をそれほど含んでいないが、クルアーンの暗唱やアラビア語の文法・語彙の知識が当時の王族の権威・能力を示す一指標であったことやムンパワなど西ボルネオ各地に Tuan Imam または Lebai の名称を持つイスラーム指導者がいたことなどを記している。また、宗教を理由とした、ダヤック人のような非ムスリムに対する差別的・侮蔑的な描写は見受けられない。

HUDM は 18 世紀西ボルネオ社会および西ボルネオと周辺地域との関係を考察する上で多くの材料を与えてくれる史料である。それらの考察をより発展させていくためにも、今後は Silsila Melayu dan Bugis や Tuhfat al-Nafis のような、HUDM やその内容と関連があるマレー語史料ならびに同時期の西ボルネオに関するオランダ語史料などとの相互参照を行いながら、HUDM とその記述内容の更なる分析・検討を進めていきたい。

## 山崎美保「マジャパヒト時代の王と宗教：刻文と『デーシャワルナナ』を中心に」

本研究プロジェクトのテーマ（「イスラームを国家がどのように受容し、利用していったか」）を考える際の一助として、マジャパヒト時代（13世紀末から15世紀末頃）において、王が宗教を統治にどのように利用したのかを考察する。本発表では刻文と年代記である『デーシャワルナナ』を史料とし、その一端を明らかにしたい。今回の報告ではマジャパヒト時代の刻文のうち、紀年のあるもの21、紀年のないもの8を検討した。王宮ではシヴァ教、仏教が中心で、シーマ（スワタントラ）を介した寺院（信仰）への王の恩恵がみられる。新たな寺院の建立や彫像の設置などについての記述はあまりなく、王が積極的に宗教建造物を建てていたような形跡はない。また称号にはシヴァやヴィシュヌが取り入れられている。これは中部ジャワ時代にも見られるが、マジャパヒト時代には特にジャワの王や他の島々を統べる王などの表現がさらに追加されている。一方、『デーシャワルナナ』では、仏教、シヴァ教、ルシ、ヴィシュヌ教のすでにある宗教建造物に対する王の保護・恩恵が見て取れる。また、これら以外に（明確な記述はないが）土着的な信仰の要素が見て取れる（シュラーダの儀礼など）。王（国）による宗教の利用という点では、王は仏教と／あるいはシヴァ教の信奉者であるが、他の宗教・信仰を排除することはなく、恩恵を与える（恩恵には宗教による優劣はある）。中部ジャワ時代から、王の宗教に対する態度は変わらず、包括主義的（inclusivism）といえるのではないか。王は、寺院／宗教者への寄進・保護を行い、称号にヒンドゥー教神を含み自らの権威付けとして利用する。また明記はされないが、他に土着的な信仰（刻文に見られる土着的な呪詛）を維持している。今回の報告では、マジャパヒト時代の刻文の一部しか確認できておらず、今後更に検討を進めたい。

## 吉本康子「チャムの信仰におけるポー・クツ予備的考察」

本発表は、東南アジア大陸部東端に位置するベトナム中南部のチャム社会を事例として、遅くとも15世紀以降のチャンパないしパンドゥランガにおいて生じたとみられるイスラーム受容が、現在の人々にどのように語られ、伝承されているかについて考察するものである。

今日のチャム社会には、精霊信仰や祖霊信仰、ヒンドゥー的な要素、イスラーム的な要素が融合した信仰形態が確認できる。現地の知識人たちはそれが17世紀の王ポー・ロメの時代に作り出されたチャムの象徴二元論的世界観の表れであると説く。この世界観はローカルな用語でアワル・アヒエールと呼ばれ、ホンカルという図像や太極図でも表される。アワ

ール・アヒエールはアラビア語由来の言葉であり、ホンカルはサンスクリットの聖音を表すオーンを由来とするが、チャム社会ではいずれも独自の意味で用いられている。アワールアヒエールやホンカルについての知識人たちの語りからは、それらが、イスラームの影響によって宗教的に分断した民衆を統治する為に 17 世紀以降のパーンドゥランガで考案された「チャムの宗教」を説明する世界観で、今日のチャム社会においてもなお信仰の基盤として位置付けられていることが分かる。

本発表ではまた、土着、ヒンドゥー、イスラームの各要素が融合したチャムの哲理とみなされている神話伝説「サカライ・ポー・クツ」の内容を紹介し、イスラーム的な要素がどのような民衆に伝えられようとしていたのか、いるのかについての考察を試みる。「サカライ・ポー・クツ」には様々なヴァージョンがあるが、ここでは 2018 年刊行 Sakaya 著『チャムの神話と伝説』所収の「Sakkarai Po Kuk」を資料とした。底本は貝葉にチャム文字チャム語で記された写本である。冒頭はサンスクリット由来の「Sua tik kik dhik / (Skr) suattik si dhik kariya (「幸運、成功、勝利」)」で始まり、最後は「Po Pur とはまさに Phuatimah である」で終わる。内容は、天地創造の話、神々の位階の話、呪文の話、創造神 Po Sapajeng の話などで構成されており、Po Kuk が最初に顕現させる Po Nagar (現在のチャム人「バラモン教徒」の主たる神(女神))をはじめ、アラビア語由来の Po Uwluah (ポー・アラー) や土着の神々が次々に顕現して天地を創造し、シャハーダの後半部分などアラビア語由来の文言(「呪文」)が読めと説かれ、Po Sapajeng と Po Sapolai が降臨して人が作られる等、様々な地域由来の名称等が渾然一体となって登場する。

以上の様に、今日のチャム人が実践する世界観ないし歴史を解明する手がかりとしての語りや神話伝説からは、チャンパ/パーンドゥランガは、イスラーム的な要素を既存の宗教的な要素と融合させることで受容し、内政的には人々を統治しようとしたと考えられる。ただし、今のところ、それは今日の人々が「実践する歴史」としてのみ有効な見方であり、歴史的事実と呼べるものではない。アワール・アヒエールやホンカルについては、ポー・ロメとの関係も含めて、いつ、誰が、どのように考案したのか等の歴史的事実の真偽は未確認であり、サカライ・ポー・クツについても、いつ、誰が、最初に創作した神話伝説なのかについては不明である。チャンパ/パーンドゥランガの初期のイスラーム受容の実態を解明するにあたっては、歴史的事実を確認することができる史料の有無も含めて、今後も引き続き他地域との比較研究・調査される必要がある。

\*\*\*\*\*

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.